長湯温泉、開湯三百一年記念祭　御神楽

浅草流松尾神楽

大分県は、宮崎県「高千穂神楽」、島根県「出雲神楽」と並ぶ日本国内でも、郷土芸能「神楽」の盛んなところです。

豊後大野市では古くから、春・秋のお祭りには欠かすことのできない郷土芸能として、「神楽」が各地で守り受け継がれてきました。

豊後大野市内には、『大野郡俚楽会』が明治三十六年（一九〇三年）に結成され、現在松尾神楽社他、所属する十一神楽社があります。

「松尾神楽社」は、豊後大野市三重町の南部、松尾地区に城山神社建造とともに伝わる、町内唯一の浅草流神楽（豊後大野市大野町発祥）が松尾神楽です。元和年間（江戸時代初期）から享保年間に神楽三十三番が古事記（日本最古の歴史書）の神話を題材に演劇的要素を濃くした神楽が考案され、錦織りの華やか衣装や、鬼面をつけ太鼓や鐘、笛の拍子で演舞するようになりました。昭和五十二年県指定無形民俗文化財に指定され、平成三年には三重町合併四十周年記念行事として、二日間にわたり三十三番の舞を全て上演しました。

平成十九年、韓国益山市へ豊後大野市訪問団として「ソドン祭り」で二日間特別公演、伊勢神宮式年遷宮記念奉納として平成二十年に伊勢神宮で神楽四番の奉納を行いました。

現在、伝統文化継承のため「お祭りでの奉納舞」「イベント公演」　又「子供神楽教室」を開催し、未来の後継者の育成も行っております。

今回記念イベント公演として、（八雲払い、五穀舞）など十番の神楽を奉納いたします

演目紹介

『天孫降臨』

この番組は、天孫邇々芸命が高天原の御座を離れ、葦原の中つ国に降臨する物語の舞である。

『天孫降臨』番組の物語

邇々芸命は、祖母天照大御神・祖先の高御産巣日神の命令に従って葦原の中つ国に降臨することにした。

従神は天児屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命の五柱を中心とする諸神である。

出発にあたって、天照大御神は勾玉・鏡・剣を与え、鏡を天照大御神の御霊として祀るように仰せられた。

一行は天の八衢（やちまた）にさしかかったとき、上は高天原を、下は葦原の中つ国を照らしている神に出会った。邇々芸命（ににぎのみこと）が天宇受売命（あまのうずめのみこと）にその神の名を尋ねると「自分は猿田毘古神（さるたびこのかみ）である。天孫の降臨されるのをお待ちしていた。先頭に立ってご案内したい」という。

邇々芸命は猿田毘古神（さるたびこのかみ）に先導させ、天上の雲を押し分けて筑紫の日向のくじふる嶽（たけ）に降臨を果たした。

『八雲払』

この番組は、高天原を追放された須佐之男命が八俣大蛇を退治する物語の舞である。

『八雲払』番組の物語

高天原を追放された須佐之男命は出雲の国の川上で娘を中にして泣いている老夫婦に出会った。名前は足名椎、娘は櫛名田比売という。須佐之男命は櫛名田比売を櫛に変身させて、自分の髪にさし、足名椎と手名椎に強い酒を造り、八つの酒船に入れて置くように命じた。

待っていると、老夫婦のいうとおりに八俣大蛇が出てきて酒船に頭を入れ、飲み干して寝てしまった。須佐之男命は刀を抜いて大蛇をずたずたに斬った。このとき、尾から出た都牟羽の太刀（天叢雲剣

、後に草薙剣（くさなぎのつるぎ）を姉の天照大御神（あまてらすおおみかみ）に献上した。

この後、須佐之男命（すさのおのみこと）は須賀に宮殿を建てて櫛名田比売（くしなだひめ）と住むことにした。折から瑞祥の雲が立ち昇ったので、須佐之男命（すさのおのみこと）は歓びの歌を歌った。

八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を

『柴曳』

この番組は、天照大御神を天岩戸の外に連れ出すため、天児屋命が天香具山の真榊を根こそぎにして、御統の玉・八尺鏡・幣などを取り付け、天岩戸の前に立てる物語の舞である。

『柴曳』番組の物語

天照大御神は弟神須佐之男命のたび重なる乱暴を怒って天岩戸に隠れた。天照大御神を天岩戸の外に連れ出すため、思金神はさまざまに策略を講じた。天児屋命と布刀玉命には天香具山の真榊を取って来るように命じた。

二神は天香具山に行き、根のついたままの真榊を引き抜いて持って帰り、玉・鏡・幣などの祭具を取り付けた。

この番組は、天香具山の真榊を力いっぱい曳き抜くようすをあらわした舞である。